

伝統地生活者と研究者の視点

保全と再生に可能性

10月中旬、木曾町開田高原の伝統的管理の草地の半分は、シンドウやヤマラッキョウなど晩秋の花が咲く。9月に草を刈った片方には

地這(はい)性のキジムシロが残る。希少種のチョウ、チャマダラセセリの食草だ。来春この草刈り地には火は入らない。

「信州に素晴らしい草原がある」。研究者内の言葉をきっかけに、同研究室の永田優子さん(25)は3年前に調査を始めた。今年は特に



「チャマダラセセリの蛹(さなぎ)が越冬し、火入れにあわずに生き残る場所となっている可能性がある」と神戸大学大学院生物多様性研究室の内田まきさん(33)は推測する。

「花の数」に焦点を当てた。生物多様性の高い伝統地は、春から晩秋まで花も多種多様で数も多い。「色とりどりの花が次々に咲く草原の美しさに引かれた。素晴らしい草原の姿を見

てこられて幸せを感じる」と永田さん。

だが残る伝統地は多くない。地権者の高齢化もあり重労働の草刈り管理は難しい。火入れの技術の伝承にも課

題は多い。何百年も続いてきた馬との生活で維持された「伝統的採草地の植生」が消えるかもしれない。

その一方、比較調査で保全と再生の可能性も見え始めた。日本の各地で草地が激減し、かつてありふれていた花々の咲く植生が消える中、開田はまだ潜在力が高い。「3年内に手を打てば非伝統的管理

の草地にも再生の可能性がある」と2人は話す。今年の現地調査は10月で終える。データの整理結果が待たれる。

木曾町環境協議会の副会長・稲垣康さん(48)は、県の希少野生動物植物保護監視員として伝統地でチャマダラセセリを見守る。環境干し草を集めた「にこ」が立つ伝統地。今春火を入れ、秋に草を刈った1年目の草地(手前)と、草を刈らずに来春火を入れる2年目の草地(奥) 11月



木曾町環境協議会の副会長・稲垣康さん(48)は、県の希少野生動物植物保護監視員として伝統地でチャマダラセセリを見守る。環境干し草を集めた「にこ」が立つ伝統地。今春火を入れ、秋に草を刈った1年目の草地(手前)と、草を刈らずに来春火を入れる2年目の草地(奥) 11月

調査の会社に勤め故郷にUターンした稲垣さん。開田の豊かな自然環境への思いから。開田村が合併で木曾町になった後は「環境活動は個人では限りがある。ネットワークが必要」と同会の発足を提言した。昨年からは同会の事業として、NPO法人日本チョウ類保全協会(東京都)の草刈りに協力する。稲垣さんは「生活者や研究者など、それぞれの視点や立場の人がいる。一度集まり話し合う機会があれば」と話す。(田澤佳子)